茶ぐわ～ わんたく 191

お茶を飲みながら、ぎのわんの歴史をのぞいてみませんか？

幻の「ナーシルミチ」

「ナーシル」「ナーシルダー」と聞いて、意味が分かる方は結構な「人生の」ベテラン選手かと思われます。「ナーシルダー」とは、「苗代(なえしろ・なわしろ)田」のことで、稲の苗を育てる田のことをいいますが、馴染みのない方が多いかと思われます。

「苗半作(なえはんさく)」という言葉があるほど、稲の生育のよしあしはこの「苗」作りで決まるとされ、稲作の重要な工程とされています。苗代に稲の種をまく、播種(はしゅ)儀礼は「タントゥイ」と呼ばれ、こちらも豊作を祈る予祝(よしゅく)儀礼として、かつて地域における重要な行事として行われていました。

▲写真1　喜友名から伊佐方面を臨む。豊かな水田が広がるこの中に「ナーシルミチ」がありました。1954年頃撮影

宜野湾市内の各地でも、「ナーシルダー」(苗代田)という地名を耳にすることもあるかと思います。かつて、各集落では、よく苗の育つ田を「苗代」としてそこで苗を育て、各家庭での田植えに備えました。

伊佐や新城、喜友名、宇地泊、大謝名には「ナーシルダー」という地名があり、さらに伊佐には「ナーシルミチ」という名の道があったことが分かっています。宜野湾市教育委員会が刊行した報告書『ぎのわんの西海岸』によると、伊佐からナーシルダーに行く道であり、さらに、伊佐から喜友名へ行くときに通った道のことです。その先の喜友名には「タントゥイモー」という場所もあり、稲作を表す地名から、かつてこのあたりが稲作地帯であったことがうかがえます。

戦前の宜野湾村において西海岸側の地域が特に稲作が盛んで、なおかついい「苗」をつくっていたので、内陸部から西海岸の「ナーシル」まで苗を買いに行っていた、といった話がこういった地名からも見えてきます。

戦前の豊かな農村風景を想起させるこの「ナーシルミチ」は、現在のキャンプ瑞慶覧内にあります。

※市史の最新刊『伊佐浜の土地闘争(資料編)』(宜野湾市史 第8巻 資料編7 戦後資料編Ⅱ)も好評発売中です。

【問い合わせ】市立博物館 ☎870-9317

▲写真2　現在はキャンプ瑞慶覧内となっています。2020年1月撮影

ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く〔其の48〕

「我如古ヒージャーガー」

皆さんは我如古ヒージャーガーをご存知ですか？我如古区公民館の近くにある湧き水です。我如古の人々が共同で使ってきた湧き水で、最も古いものと言われています。沖縄戦では数多くの文化財が破壊されましたが、我如古ヒージャーガーに被害は無く、現在も美しい石積みを見ることができます。その我如古ヒージャーガーの内部に入る機会がありましたので、様子を紹介します。

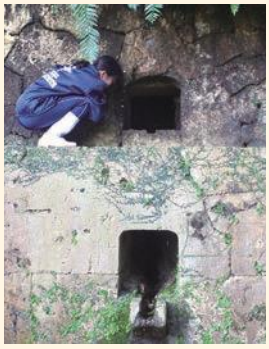
昨年、地域の方から我如古ヒージャーガーの樋口から水が流れていないとの連絡がありました。内部を覗いたところ、ヒージャーガーの上部にあるガジュマルから、大量のひげ根が樋の奥へ伸び、水の流れを止めていました。再び水を流すには、ひげ根を取り除かなければなりません。ハブやオオゲジの存在を気にしながら、中に入ることにしました。

ヒージャーガーの内部に入るにはまず、35㎝×45㎝の入り口をくぐり抜けます。入り口手前の通路は40㎝程の幅しかなく、また、入り口の奥行きは60㎝程しかありません。落ちないように緊張しながら身を丸めて這いこみました。内部は高さが170㎝はあり、幅も125㎝とゆっくり立つことができました。溝が造られ水が流れるようになっています。溝の奥は、クチャ(粘土質で水を通さない土)のままで、上部の石炭岩から浸み通ってきた水が溝を通って流れ出るようになっていました。

溝に伸びたひげ根を取り除き、再び水は流れるようになりました。

【問合せ】文化課 ☎893-4430

▲内部の様子



▲入り口を覗く

▲我如古ヒージャーガー